

幼児側音化構音障害児の構音点指導

○ 梅村 明美
（寒河江市立寒河江小学校）

梅村 正俊
（山形市立第三小学校）

Key words: 側音化構音, 早期指導, 模倣関係

I はじめに

側音化構音障害は、舌の動きの特異性から指導が難しいといわれている。そのため、自分の音の誤りや舌の動きを自覚しやすい中・高学年から指導を開始することが多い¹⁾。

しかし、近年、幼児の側音化構音の相談も多く、保護者も入学前に改善したいと考える傾向にある。筆者も、できれば子どもが自分の構音の誤りに気づいて嫌な思いをしたり悩んだりする前に改善したいと考えている。

ここでは、幼児期に指導を開始した事例の [tʃi] の構音点指導について報告し、指導法について考察する。

II 指導事例

1 対象児：年長（6歳3カ月）女児

2 単語構音検査結果

側音化構音 / i, ki, ji, tʃi, pi, ci, ti, gi, dʒi

kj, ʃ, tʃ, n, ɕ, tʃ, ɟ

単語・短文・会話での誤りの一貫性：+

3 初回面接時の様子

椅子に座ると姿勢を直し、じっと指導者を見て、はにかんだような笑顔を見せる。聞かれたことに対し、少し間を空けて単語で答えることが多い。おっとりとした印象を受けた。構音の誤りを気にする様子は感じられなかった。

4 指導の方針と方法

- ① 耳の訓練や舌の体操は行わない。
- ② /i/も側音化しているが、/i/からの指導はしない。
- ③ 指導は、「へんなべろのまねっこ」と名付けた舌の動きの模倣から始める。

5 指導経過

[tʃi] の構音点指導の概略は、下記の表にまとめた。

No	指導内容	子どもの様子と所見
1	初回面接	○前記
2	[tʃi] の音の模倣 （まねっこじゃんけん）（へんなべろのまねっこ）	○指導者の口元に注目し、素直に同じ動きができる。べこちゃんの口の形で声を出したり、鞘のように唇とがらせたりを模倣しながらにんまりしていた。舌先を上下に動かし、その感触を楽しんだりするうちに [tʃi] 音が出せた。提示音が [tʃ:] でも正しく模倣できた。 ○ただし、自分が「チ」の正しい音を出しているという自覚があるのではなく、模倣として言っている状態である。 ○「チーズ」などの意味を持った単語を提示すると側音になるが、「まねっこの音だよ」と言われると、自分なりに舌の動きを調整して正しく構音することができた。
3	『tʃi』 = 「ち」 単語の語頭・語中・語尾・短文で正しく言う。 itʃa tʃu tʃoi の構音指導	○『まねっこ』の際、『tʃi』と子どものノートに表記して出していた音が、実は正しい「チ」の音なのだということを抵抗なく受け入れた。 ○「ちがうよ」「ちがうってば！」などのパリエーションをつけても正しく構音できる。 ○「いちねんせいがいちばんさいい」も上手に構音できた。 ○ itʃa tʃu tʃoi の練習では、言い慣れている「お兄ちゃん」になると側音化してしまっていたが、気をつければ正しく構音できた。

III 考察

1 模倣による構音点指導

梅村²⁾³⁾は、誤り音の自覚の有無や直す意欲に関係なく構音指導が可能となるように、「変なべろや変な音のまねっこ

という子どもに親しみやすい名称を付けての模倣による構音指導を行っている。これは、①べこちゃんの舌のまねや舌を右や左に動かしたりして、指導者の舌の動きを模倣するコツを楽しみながらつかませる。②舌を出したまま変な音を出してお互いに笑い合ったりすることで音声模倣への抵抗感を和らげる。そして、③指導者の微妙な舌の動きを模倣させながら、徐々に指導目的音に近づけていくという方法である。

普通に「チ」の提示で本児に模倣させたところ、模倣しようとしただけで、音を出していないにもかかわらず舌が盛り上がりてくるのが観察されたが、『べろのまねっこ』で舌先の動きの模倣であることがわかってくると、次第に舌の盛り上がりがなくなり [tʃi] の構音ができるようになってきた。

本児が [tʃi] を産出するまでの過程を観察すると、本児からは、「直したい」という気持ちでの模倣というよりも、「模倣を楽しむ」という感じが伝わってきた。

2 /i/から指導しなかったこと

/i/も側音化構音の場合、/i/から指導を始める¹⁾のが一般的なのだろう。しかし母音の場合、明確な構音点がないことから舌をどのように模倣するかが子供には捉えにくく難しい。「舌を動かさない」という指示も「舌を動かさない動き」と理解することが多く、意図的に舌を動かさないようにしようとするあまり逆に動かしてしまう様子も観察される。また、梅村³⁾は、本児と同様の側音化構音のある年長児に対し [tʃi] から指導を始め10回で終了した例を紹介している。従って、本児に対する指導でも /i/からの指導は行わなかった。

本児の指導では、/tʃ/ができるようになった時点で、/tʃ/ の /ʃ/ の後に有声子音になる [m] を加えた [tʃm] を、[ʃm:] や [tʃm:] や [tʃ: m:] などのように模倣をさせることで自然に /i/が生じて [tʃi] になるようにしたところ、[tʃi] を導くことができた。

3 舌の体操を行わなかったこと

側音化構音は、『特定の音を構音する』際に、舌が盛り上がったたり下顎や口唇が偏位したりなどすることで呼気が片側または両側に寄ることで生じる誤り音のことである。従って、『それ以外の音を構音する』際には普通の構音運動を行っていることになる。つまり、構音運動に関わる神経や筋肉自体に機能的または器質性の障害があるわけではないので、舌の体操など舌を操作する能力に関わる指導は不要と考えている。

本児の場合も、舌の体操等舌の機能面に対する指導は全く行わなかった。しかし、構音指導の初回時には舌の平らな正音での [tʃi] が、さらに、次時には短文の中での構音が可能になったことから指導上何ら支障はなかった。

IV まとめ

- ① /tʃ/からの指導でも /i/を導き出せたことから、/i/から指導しなかったことや舌の体操を行わなかったことが構音指導2回目、短文中の [tʃi] の構音を可能にした。
- ② 互いに楽しめる関係の中で構音運動に関わる模倣を行うことで、側音化構音の早期指導は可能である。

参考文献

- 1) 湯井 豊 1992 構音障害の指導技法 学苑社
- 2) 梅村正俊 1985 障害性構音障害の明確な判断と効果的な指導のあり方 第14回全量言語学大会発表資料
- 3) 梅村正俊 1999 低年齢児の「誤り構音」への指導-側音化構音への指導は、難しいわけじゃない- 県立研究集第24号 (MEMURA Akemi)